

美的映像の社会的作用と効果 ～リーフェンシュタール作品の考察を通して～

Social action and effect of aesthetic image

1K04A122-8

新谷 更佑

指導教員

主査 リー・トンプソン先生

副査 矢島忠明先生

《序章、研究の動機・目的》

現代社会において、我々が情報を入手する手段はインターネットから新聞まで、人それぞれであるが、ここでは CM というメディアを例にあげて、映像と情報の結びつきを論じると共に、私たちの中に存在する先入観という機能が、映像の作用によって生まれているのではないかという研究の動機にもなった考えを述べる。そして、映像の価値と作用をいち早く見出した人物、レニ・リーフェンシュタールがその作品と共に残した、現代への問題提起を、示す事で第一章以降につなげ、ここから、本稿の研究課題である“美的映像の社会的作用と効果”についてのスタートとさせる。

《第一章》

本稿の中心に置く人物である、レニ・リーフェンシュタールについて、彼女の幼少期からナチス・ヒトラーに出会い、映画を製作するまでの過程を読み解く。まず一項目としてダンサーから女優、そして映画監督という様々な顔を持ったリーフェンシュタールの人生に触れつつ、以後、彼女の映画・映像制作の基本となっていく山岳映画、またアルノルト・ファンクの出会について説明する。次に第二項目として、彼女の人生を一変させ、激動の歴史の中へと導いたヒトラーとの出会いをひも解く。

《第二章》

リーフェンシュタール作品を読み解く上で欠かせないナチスについて解説する。第一項目では、ナチスが、その成立から第二次世界大戦までたどった道のりを解説し、第二項目であらゆる文化やマスメディアを独占的に一元化したメディア制作について触れ、またその根幹にある国民啓蒙宣伝省を紹介する。第三項目ではその宣伝省大臣であり、ナチスのプロパガンダ制作を実質的に握っていたゲッベルスについて考察する。第四項目では実際に行われたプロパガンダ政策について、映像文化が無かった時代からプロパガンダの先頭に立っていたラジオと、ゲッベルスが独自のプロパガンダ効果を提唱し、またリーフェンシュタールとのつながりともなる、映画について考察する。

《第三章》

この章からは、実際にリーフェンシュタールが関係した映画、特に党大会を題材とした二作品について

分析を行っていく。まず第一項目で、彼女が初めてナチスから依頼を受け制作した『信念の勝利』をひも解き、次に第二項目でナチス・プロパガンダ最大の遺産とも言われる『意志の勝利』を分析する事で、リーフェンシュタールの

美的追求と映像技法がもたらした、単なる記録映画ではない作品の美的価値とプロパガンダ効果について考察する。

《第四章》

この章は、第一項目でベルリン・オリンピック開催の経緯を説明し、第二項目では、更に細かく項目わけして、まず前章の『意志の勝利』にも見られる、リーフェンシュタールの時間的な流れにとらわれない、美的リズムに基づく編集・演出作業をみていく。そして、そこから見えてきた、彼女の唯美主義的姿勢とナチスのイデオロギーの合致について説明する。更に、その映像に隠された、美的価値と政治的価値を検証する事で、映像の持つ両価値的作用を読み取り、また解説する。

《第五章》

この章では第三章、第四章を踏まえて、見えてきた美的映像の社会的作用と効果について、第一項目で、時代の変化と共に、写真という瞬間記録媒体から、映像という動きや時間経過を記録する媒体へ移行する過程を見ていき、それぞれの特徴と、私たちの脳内で起こる映像の再構成について論ずる。第二項目では、エイゼンシュテイン監督の映画を題材とし、映像が、様々な撮影・編集技術の進歩によってストーリー性や、それによる暗示力を身につけたことを解説していくと共に、それが引き起こす情報の欠落や偏りについて論ずる。最後に第三項目として、現代の CM 制作に活かされるプロパガンダ技法について解説する。

《終章》

第一章から論じてきた、リーフェンシュタールとナチス、そこに発生した美的映像の社会的作用と効果は、それぞれに、責任と課題が今なお課せられており、これはメディアが急速に発展したはずの現代社会においても発生することである。そこで、この章では全章から読み解いた結果と、それが鳴らす警鐘について、現代に置き換えて解説し、その打開策として、メディアの双方向性を示すのと同時に、その意味と価値を改めて提起することで、本稿の仕上げとする。